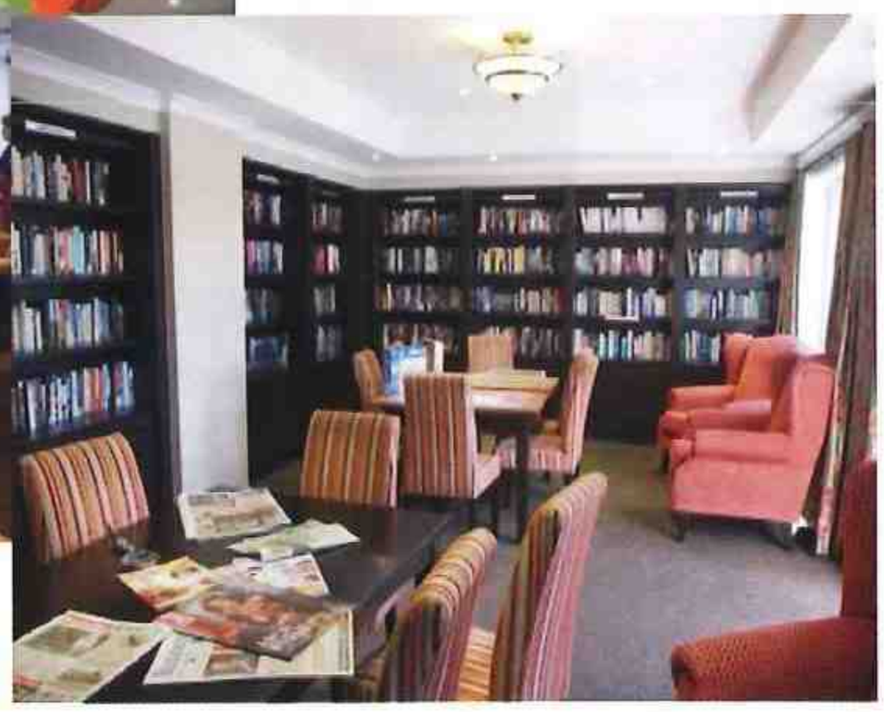
トタラホスピス

- 食事やガーデニング、清掃などは500人のボランティアが行っていて、ニュージーランドのボランティア文化を感じた。
- モットー “Living Every Moment”で掲げられている「あなたがあなただから。そして亡くなるときまで楽しんで生きてもらいたい」という言葉にはとても考えさせられた。
- 患者を中心としたチーム医療の中に、全人的苦痛のうちのスピリチュアルな苦痛に対する緩和ケアが含まれているのが、日本とは異なる点であった。
- 死を迎える場所にもかかわらず、施設の雰囲気もスタッフも明るく、私もこういうところで死にたいと思った。
- 地域に根付いた開放的なホスピスであり、日本でも今後このような施設が必要であると思う。
- 病気のことを忘れるくらい、心の落ち着く場所だった。
- 日本は医療費削減の観点から、緩和ケアから在宅・地域看護へ移行しようとしているが、緩和ケアも大切にする国づくりをすべきだと思う。同時に、私もそのことについて周囲の理解を得られるよう、努めなければならないと感じた。



ブルースマクラーレン高齢者施設

- 施設全体が豪華旅客船というリゾート感をコンセプトにしていた。
- 症状や介護の程度によって、ビレッジ内で入居エリアの移動ができるので、転院をする必要がなく、入居者や家族にとって負担が少ない。
- 毎日さまざまな催し物が企画されており、生活の中に張りや楽しみを見つけていけるよう工夫されていた。また必要な筋力を維持するために、週に３回、１時間ずつ、運動能力に合わせたエクササイズのクラスが行われていた。
- 認知症患者にはダイバージョナルセラピーが取り入れられていて、歌を歌ったり、ボール遊びをしたりと、9時から18時まで専門看護師が休みなくレクリエーションを提供していた。
- 看護師が、医師、ケアキーパー、栄養士、理学療法士、作業療法士などとともに、患者や家族から得られた情報と病態をもとにアセスメント・看護プランの立案を行い、リスク管理を実施している。また介護のプランについては定期的に査定が入り、一人一人のケアの質の保証が徹底されていた。
- 今まで老年看護に興味はなかったが、とても価値のあることと知り、携わってみたいと思い始めた。
- 認知症患者さんたちが、驚くほど穏やかで幸せそうな顔をしていたことがとても印象的だった。
- 老後の包括的なケアができる場所で、良い死に向かえる環境を学べて本当に参考になった。
- 「個人」をとても大切にしていることにとても感動した。日本の目指すＱＯＬの向上、健康寿命の延伸を達成するためには、個人に焦点を当てるべきだと感じた。
- 高齢者の看護や認知症患者の看護はいつもチャレンジであるという言葉が印象的だった。型にはまった方法でケアを行うのではなく、患者に合った方法を見つけていくことが大切であるということを学んだ。